HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学経営学部開設10周年記念特別講義 北海道の魅力をデザインする ： 駅という魅力を中心に
著者	臼井，幸彦; Usui，Yukihiko
引用	北海学園大学経営論集，10(4)：163-166
発行日	2013-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北海学園大学経営学部開設 10 周年記念 特別講義

北海道の魅力をデザインする

～駅という魅力を中心に～

講演者　多摩美術大学客員教授　臼　井　幸　彦

○司会　経営学部の開設 10 周年記念の特別講義として，授業は進めたいと思います。

それでは，きょうのスピーカーの多摩美術大学客員教授，臼井幸彦さんを紹介します。よろしくお願いいたします。（拍手）

○臼井氏　只今，御紹介頂いた臼井です。私は，国鉄，JR と 40 年以上に渡って，ずっと鉄道マンをやってきました。そして，JR 時代は北海道の駅周辺開発を中心に，特に駅に関わってきました。そういうことから，大学側から頂いた今日の講義のテーマも「北海道の魅力をデザインする ── 駅という魅力を中心に ──」となったのだと思います。駅についてしか語れませんが，お付き合い頂ければと思います。

そこで，「駅の魅力」と言いますと，それは駅と利用者，市民との関わりの中から初めて生まれるのだと思います。私は，駅の魅力を知る手段として映画をよく参考にします。映画は主人公の人生を描きますが，駅は主人公の重要な人生の舞台として登場することが実に多く，駅の魅力がよく伝わってきます。

駅が効果的に使われた映画を御紹介したいと思います。まず『ラ・シオタ駅への列車の到着』という映画です。映画を発明したルイ・リュミエールの作品で，世界で最初に公開された駅映画ですのでご覧下さい。上映時間は 50 秒ぐらいです。

（映画上映）

○臼井氏　この映画が作られたのは 19 世紀末です。駅は南フランスのラ・シオタ駅で，マルセイユ～トゥーロン間にあります。写真でご覧の通り，線路が 2 本ありまして，専門用語では 2 面 2 線の相対式ホームの駅と言います。ラ・シオタは世界で最初の映画館もあるフランス有数のリゾート都市で，リュミエール兄弟の別荘もありました。ラ・シオタ駅が世界で最初に映画に登場した駅です。

次に『ヒューゴの不思議な発明』です。マーティン・スコセッシの作品で 2011 年，美術部門，撮影部門などでアカデミー賞も受賞しています。ヒューゴという少年が主人公で，パリの駅が舞台になっています。パリには 6 つの主要駅があります。舞台の駅には時計塔があるのですが，時計塔のあるパリの駅というとパリ・リヨン駅ですが，明らかにリヨン駅の時計塔とは異なります。これはあくまでも CG で描かれた架空の駅です。そこでこのヒューゴとトリック映像で有名な初期の映画作家ジョルジュ・メリエスやその娘との交流が描かれる，まさに「駅と映画」の映画です。架空の駅といっても明らかに北駅を中心に，パリの各駅のいろいろな要素が組み込まれている作品で，機関車が暴走して脱線するシーンがあるのですが，これはまさにモンパルナス駅で過去に実際に起こった事故を思い出させます。

最古と最新の映画を紹介しましたが，その他の映画も紹介したいと思います。映画と言えば，ハリウッドと映画発祥の地，フランスということになりますが，ここではパリの主要駅が登場する映画を紹介します。

先ほど紹介しました時計塔のあるパリ・リヨン駅です。ヨーロッパの主要駅は行き止まり形式の駅，専門用語で頭端式の駅が多いのですが，駅名は行き先の都市名などで呼ばれることもあり，パリなのにリヨン駅なのです。これはリヨン方面への列車が発着する駅なのですね。このリヨン駅は実によく映画に登場します。時間の都合もありますので，多くは紹介できませんが，『カサブランカ』のイングリッド・バーグマンとか，『昼下がりの情事』のオードリー・ヘップバーン，『突然炎のごとく』のジャンヌ・モローなど大変素敵だったですね。この駅にはレストラン「ル・トラン・ブルー」があり，アールヌーボーの美しい内外装で有名です。この「ル・トラン・ブルー」もよく映画に使われます。

次にオーステルリッツ駅です。ちょうどリヨン駅とセーヌ川を挟んで向かい側にある駅です。パリの駅の中では比較的地味な駅舎ですが，『リスボン特急』などに登場します。

次はサン・ラザール駅。行き先の名前はついていませんが，ノルマンディー方面への列車が発着する駅です。ヨーロッパの駅では，ホームから駅前広場まで平坦で，バリアフリー状態の駅が多いのですが，パリの駅の中で唯一ホームレベルと駅前広場レベルに高低差があり，階段があります。このサン・ラザール駅の階段は映画的には非常に魅力的な舞台装置になっています。『男と女』『ディーバ』などではこの階段が効果的に使われています。

次に，北駅です。パリから北へ，ベルギー，オランダ方面の列車が発着します。この写真の映画は皆さんよく御存じと思いますが，オドレイ・トゥトゥの『アメリ』です。この映画の中の駅は，外観は北駅ですが，内部は東駅で，北駅外観にある駅名サインも東駅に変えられています。北駅と東駅を混合して造られた駅です。ジャンピエール・ジュネという監督は，CG 映像を大変得意としていまして，こんな素敵な駅を作り上げているのです。この映画でアメリが食べていたクリーム・プリュレが，東京で一時ブームになりましたが，映画というのはそんな影響力もあるのですね。

次は，パリ・東駅です。ドイツやルクセンブルクなどパリから東に向かう列車が発着する駅です。『アメリ』で東駅の内部が使われているのは前述した通りです。東駅では，特に駅舎前面のバラ窓が印象的です。『地下鉄のザジ』でも東駅が使われています。原作はレーモン・クノーで監督はルイ・マルです。

次はモンパルナス駅です。実はこの駅は，ほとんど映画には使われません。既に紹介した 5 つの駅との違いがはっきりわかると思いますが，駅らしいものが感じられないですね。伝統的建築様式だったモンパルナス駅が 1969 年，駅周辺の再開発でこの近代的な駅に建て替わったのです。フランスの新幹線 TGV が走ることになり，それに対応して駅の上に人工地盤を建設し，１層目は駐車場に，２層目はビルと公園になりました。公園から駅のほうを見るとモンパルナスタワーも見えます。モンパルナスタワーはパリの景観にそぐわないと，大変に不評でした。ですから，今は，パリ中心部では，こういう高層ビルは建てられませんね。そしてこの駅も，駅らしくないと大変不評で，それ以来，この駅は映画にはほとんど登場しません。

実は，そのモンパルナス駅が大変不評だったので，フランス国鉄では，こんな駅を造ってはいけないと反省し，駅舎憲章というものをつくり，その後に建設する TGV の駅は，この 5 つの条文を満たさなければならないとしたのです。その後は，モンパルナス駅のような駅はつくられなくなりました。

この５つの条文の中，「駅は駅らしくなければならない」と「駅は街と調和しなければならない」が特に重要だと，長年，駅の開発に携わって，そう思います。こんなところから本当の駅の魅力が生まれてくるのではないでしょうか。

次に北海道の駅の魅力を知っていただくために，札幌駅を採り上げます。これは1908年に建設された３代目の札幌駅で，ネオ・ルネッサンス様式の木造駅舎です。この駅は黒澤明監督の『白痴』に登場します。三船敏郎と森雅之，ちょっと古いので御存じないかもしれませんが，冒頭，この二人が駅の向かいにある写真館のウインドウにかかる原節子の写真に見入っています。そのウインドウのガラスに札幌駅の屋根とドーマー窓が映り込んでいるのです。そのシーンが大変印象的でした。

この辺になってくると，若い方も御存じだと思いますが，『幸せの黄色いハンカチ』です。山田洋次監督。桃井かおりと高倉健。ここでは池北線の陸別駅が舞台になります。次に『遙かなる山の呼び声』です。これも山田洋次監督，高倉健主演ですね。舞台は標津線の上武佐駅です。

それから，『鉄道員（ぽっぽや）』。富良野線の幾寅駅が使われています。映画の中では「幌舞駅」になっています。監督は降旗康男です。山田洋次と同じように駅を描くのが得意な監督です。主演は高倉健。

それから，これは比較的新しい映画です。2010年公開の『春との旅』。監督は小林政広。増毛駅だけではなく，あの３・11で被害のありました大船渡線，鹿折唐桑駅も登場します。

多くの映画の中で，駅の魅力を率直に伝えているのは監督降旗康男の『駅　STATION』ではないでしょうか。映画は，銭函駅から始まって，増毛駅で終わります。主演は駅が似合う高倉健で，ここでの役は刑事です。駅の魅力と本質を伝えるシーンがあります。増毛駅と増毛の街が舞台になります。増毛の街で若い女性の殺人事件が起こります。高倉健演じる三上刑事が犯人，吉松五郎（根津甚八）を上砂川駅で逮捕します。吉松五郎の妹が烏丸せつ子です。彼女は駅前の風待食堂で働いています。三上も時々，食事に行って，彼女を知っているわけです。吉松五郎は刑務所に入ります。三上は妹を憐れんで名前を伏して，吉松五郎にずっと差し入れを続けます。刑が確定し，いよいよ明日，死刑が執行されるその前夜，吉松五郎は，誰だか分からないが，名前を伏してずっと差し入れをしてくれた三上に対し，辞世の歌を贈るのです。その歌はこういう歌でした。「暗闇の彼方に光る一点を今駅舎（えき）の灯（ひ）と信じつつ行く」。これは，明日，死んでしまう，明日，死刑が執行される前日に，その想いを歌にしたのです。暗闇の中に何か一点の光があり，それが駅の灯りだと信じてそこに行くという歌なのです。駅と人々の間にはそんな信頼関係が生まれていたのです。駅は人々にそう思われていることを大切にしなければならないと強く思います。これが駅の魅力であり，駅の「駅らしさ」です。人々のこういう駅に対する想いを大事にして，駅を運営しなければならないのです。

こういう駅の魅力と「駅らしさ」は理論的にも説明されます。アメリカの都市計画家，ケヴィン・リンチは「都市は人々にイメージされるものである」という都市認知理論に基づき，イメージされる可能性を「イメージアビリティ」と定義し，これを高めることが都市を美しく楽しいものにするとしています。これは「都市」を「駅」に置き換えても成立します。イメージは観察者と対象との間に行われる相互作用の産物であり，アイデンティティ（そのものであること），ストラクチャー（構造），ミーニング（意味）の３つの要因で構成され，通常は同時に現れると

言っています。アイデンティティとは観察者がその対象を他のものから見分けていること，独立した実体として認めていることであり，ストラクチャーとは対象と観察者との間の空間，あるいはパターンの関係です。そして観察者にとって対象がもつなんらかの意味をミーニングといいます。アイデンティティとストラクチャーは物理的，形態的操作に強く影響されますが，ミーニングは社会的，歴史的，個人的要因から成り立ち，物理的形態からは独立したものです。

映画における駅のイメージアビリティはその大部分がミーニングで構成され，駅に凝縮している人々の様々な想いで成り立っています。そして人々の想いの中にはそれぞれの駅の「駅らしさ」が息づいているのです。

駅の魅力である「駅らしさ」を大切にすることで，北海道の魅力をデザインすることに繋げたいと切に願って，今日の講義を終わりたいと思います。（拍手）

○司会　すばらしいお話を伺いまして，どうもありがとうございました。

最後に感謝の拍手をしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）